

## 情動的関連性の気づき・気づかせの標識としてのOhとAh

*Oh and ah as the markers of affective-relevance awareness*河野 武<sup>1</sup><sup>1</sup>大妻女子大学人間生活文化研究所Takeshi Kohno<sup>1</sup><sup>1</sup>Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University  
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：oh, ah, 感動詞, 談話標識, 関連性

Key words : Oh, Ah, Emotive, Discourse marker, Relevance

## 抄録

発話は考えを情報として伝達するのみならず、同時に情動を表情として表出する。感動詞（間投詞、談話標識）は、事態をどのように情動的に包み込むかを表し分ける形式であり、顔の表情やしぐさと同期しつつ、イントネーションや声色・声質によってさらに精緻に言語化される。本論では、感動詞ohとahは、事態が情動的に意義づけられることへの話し手の気づきを伝え、また相手にもその認識に気づかせようとする標識であるとみなす。発話を投げかけたり相手の発話を受け取ったりするときに、発話内容がとりわけ重要で印象的なものであると感じられれば何らかの感情が点火する。止まることのない感情のありかを常に透明にしておくことで会話参加者の親密な心理的つながりが築かれる。ohとahは肌触りの異なる情感を表す。ohは衝動的・即応的な動的な感情を表すのに対して、ahは感情に浸り味わう風の均衡のとれた静的な感情を表す。ahは、さらに、言語文化的に広く支持されている考えや話し手と聞き手の共有知識などの背景的想定を踏まえている。さらに言えば、oh/ahには発話の述べ方に特徴的な表情・態度が伴う。ohは<生き生きとした>熱意が添えられ、ahは<満足の体>の沈潜が加わる。この発話態度がohとahの<主張>と関わる肌合いの基調を成す。oh/ahはけっして一見した場当たりの感情表現などではなく、場面や相手の発話によってもたらされた事態が話し手にとって際立って重要で印象深いものであるとき、それに呼応して情動が働くに値するもの、つまりは「情動的関連性」をもつものと判断され、初めてoh/ahが顕現する。oh/ahの誘因は情動的関連性の内発的あるいは誘発的気づき・気づかせである。ohについては、談話の切り出し、強意、相手の発話の情報価の際立ち、自分の認知状態の変移、相手との認知的差異、相手の発話の不適切性などが契機となる。ahについては、事態の出現の気づき（理解の成立や事態との主観的一体化）、背景的想定との関連づけが関与する。以上述べた立場を論証すべく、本論では、oh/ahの根幹を成す主観性がどのようにもたらされるかの機序を探求した。先行研究では、ohとahの機能的分化が満足できるほど深く考察されてきたとは言えず、また多かれ少なかれ情報の維持・管理や認知状態の変移のような客観的な機構に焦点が当てられてきたが、本論はそこを一步踏み超えるよう試みた。

## 1. 序

ことばの使用の原型は個人対個人のパーソナルな会話にある。話し手は論理的にまとめたメッセージをどのような表情を装って相手に伝えるかに腐心する。発話は考えを情報として伝達するのみならず、同時に情動を表情として表出する。感

動詞（間投詞、談話標識）は言うまでもなく情動の言語であり、事態（考え、命題内容）をどのように情動的に包み込むかを表し分ける形式である（Ameka (1992)<sup>[1]</sup>; Norric (2007)<sup>[2]</sup>; 河野 (2017)<sup>[3]</sup>参照）。情動は、顔の表情やしぐさと同期しつつ、イントネーションや声色・声質によってさらに精

妙な陰影を帯びる (Bolinger (1986<sup>[4]</sup>, 1989<sup>[5]</sup>); O'Connor and Arnold (1973) <sup>[6]</sup>; 河野 (2011<sup>[7]</sup>, 2015<sup>[8]</sup>, 2019<sup>[9]</sup>)参照).

感動詞の中であって、oh と ah は、本論の議論から次第に明らかになるように、事態が情動的に意義づけられることへの話し手の気づきを伝え、また相手にもその認識に気づかせようとする標識である。気づき・気づかせは心の動きである。発話を投げかけたり相手の発話を受け取ったりするときに、発話内容がとりわけ重要で印象的なものであると感じられれば何らかの感情が点火する。止まることのない感情のありかを常に透明にしておくことで会話参加者の親密な心理的つながりが築かれる。したがって、心理的つながりが求められない儀式的発話では oh/ah は出現しない。牧師の成婚の申し渡し、裁判官の判決、審判の判定には oh/ah は無縁である。また、通常の会話よりフォーマルの度合いが高い放送の対談などでも oh/ah は避けられる。さらには、通常の間人間関係が踏みこまれる犯罪などの場合も、犯人が oh/ah を添えて脅すことはありえないであろう。(もっとも、真の犯行ではなく、冗談や捨てぜりふであれば別である。)

oh と ah は肌触りの異なる情感を表す。次の例で大まかにその差を確かめてみよう。

- (1) a. *Oh*, (look,) there's Penelope!  
b. *Ah*, (\*look,) there's Penelope!  
(2) a. *Oh*, that feels good! Do it some more!  
b. *Ah*, that feels good! Now I just wanna die.  
(Bolinger (1989: 283))

(1)のように、発話場面に思いがけなくある人物がいることに気づき、それを相手に気づかせる文脈では oh は自然であるが ah はなじまない。気づきを表す場合には、一般的な性質を反映して、oh は衝動的・即応的な動的感情を表すのに対して、ah は感情に浸り味わう風の均衡のとれた静的感情を表す。ah は問題の人物が現れることが予測されたり望まれたりする状況にもっともよくなじむ。

(2)においては、oh は快い刺激を得たことを衝動的・即応的に伝えているが、ah は快感に浸り咀嚼している状態を表している。ah は、幸せな気分の絶頂にいる人が思いがちな「このまま死んでしまってもいいくらいだ」といったような典型的な背景の想定を踏まえている。背景の想定は(2b)のように表出されてもよいし暗黙の前提として潜在し

てもよい。ah はそのような含みを許容する。さらに言えば、oh/ah には発話の述べ方に特徴的な表情・態度が伴う。oh は<生き生きとした>熱意が添えられ、ah は<満足の体>沈潜が加わる。この発話態度が oh と ah の<主張>と関わる肌合いの基調を成す。

oh/ah はけっして気まぐれな言語的ジェスチャーなどではない。その効用は十分に計算されたものである。場面や相手の発話によってもたらされた事態が話し手にとって際立って重要で印象深いものであるとき、それに呼応して情動が働くに値するもの、つまりは情動的関連性をもつものと判断され、oh/ah が顕現する。oh/ah の誘因は情動的関連性の内発的あるいは誘発的気づき・気づかせである。oh については、談話の切り出し、強意、相手の発話の情報価の際立ち、自分の認知状態の変移、相手との認知的差異、相手の発話の不適切性などが契機となる。ah については、事態の出現の気づき(理解の成立や事態との主観的一体化)、背景の想定との関連づけが関与する。

以下、本論では、oh/ah が対象となる事態の情動的関連性への気づき・気づかせを特徴的な発話態度で述べる標識とみなしてその特性の全体像を捉えることを目指す。特に、これらの感動詞の根幹を成す主観性がどのようにもたらされるのかの機序を探る。先行研究では、oh と ah の機能的分化が満足できるほど深く考察されてきたとは言えない (James (1972) <sup>[10]</sup>; Aijmer (1987) <sup>[11]</sup>; Bolinger (1989) <sup>[5]</sup>参照)。また、多かれ少なかれ情報の維持・管理や認知状態の変移のような客観的な機能に焦点が当てられてきたが (Schiffrin (1987) <sup>[12]</sup>; Aijmer (1987) <sup>[11]</sup>; Heritage (1984) <sup>[13]</sup>参照)、本論はそこからの飛躍を試みる。

## 2. 先行理論の検討

すでに述べたように、本論では、oh/ah 発話の特性は、i) 発話時における話し手の認知状態への気づき、ii) 気づきの対象を情動的に意義が高いものとみなす発話態度、iii) 発話提示の様態 (oh は「生き生きとした」様、ah は「満足の体」)にあると見る。この特性を踏まえて、この節では oh を中心にして先行理論の問題を明らかにしてみたい。

まず、特性 i)と ii)に関わる提案として Schourup (1982) <sup>[14]</sup>を吟味してみる。Schourup は、いわゆる

間投詞 (interjection) に取って代わる品詞として次のように規定される Evincive を提案する。

- (3) EVINCIVE: a linguistic item that indicates that at the moment at which it is said the speaker is engaged in, or has just then been engaged in, thinking; the evincive item indicates that this thinking is now occurring or has just now occurred but does not completely specify its content. (Schourup (1982: 14))

Evincive は、話し手が発話時ないしはその直前に、ある考えに浸っている (いた) こと、しかしながらこの考えはその内容を完全に明らかに述べるものではないことを表示すると定義づけられている。この種の標識が表示するのは非顕在的考えであり、標識に後続する発話 (断片) の伝達内容とは区別される。oh/ah はこの特性を共有するが、Schourup に従って次のようなミニダイアログに現れた ah で確かめてみよう。

- (4) A: There were four concerts today, all in the evening.

B: Ah! That explains why Chris didn't come to the meeting: she must have been asked to work on one of the sound crews. (ibid.: 15))

ah の表示対象は B のみが知る考えであり、後続発話はその考えの説明であるとされる。確かに、ah は相手の発話への間髪を入れない感動詞であり、特に上のような一語発話では後続発話との時間差が介在するため両者の伝達内容には落差が生ずる可能性がある。しかし、ah 発話時の瞬間に後続の記述・説明内容が実質的に元々の考えに含まれていなかった、つまり意識されていなかったわけではないはずである。一般的に、意識対象は輪郭が不明瞭になりやすいと言えるが、その核心は顕示的な発話内容にあるとみても本質を取り逃がす恐れはないであろう。そのようにみなす根拠の一つとして、突然あることを思い出した場合を見てみたい。

- (5) Oh! I didn't make the phone call you asked me to. (ibid.)

oh を誘発した元々の考えが後続の思い出しの中身とは別に想定できないことは明らかである。oh には意識対象の同定まで含まれるのである。また、別の根拠として、相手の発話を受けて発した次のような独立の oh を検討してみたい。

- (6) A: . . . So this argument proves that Quantifier-Float is global.

B: Oh. (ibid.: 19)

ここでは、oh の意識対象は明らかに相手の陳述内容そのものである。つまりは相手の主張が真であることに感じ入っている様を伝えているが、oh の基底にある話し手の考えは相手の発話をなぞる形で明瞭に形成されていることは疑えない。ちなみに、Schourup の枠組みにおいては、oh に含まれる情動的成分である〈感心〉などがどのように派生するかは明らかにされていない。さらには、発話の生き生きした表情も埒外に置かれている。

次に、情報管理理論に基づく Schiffrin (1987)<sup>[12]</sup> による oh 分析を吟味してみたい。oh は情報の維持と管理に深く関与し、情報への接し方ないしは方向づけ (orientation) を行う役割を果たすものとされる。方向づけは大まかに客観的か主観的に二分される。客観的方向づけには、i) 発話の修正 (repair) に見られる情報の置換・再分配、ii) 質問／答え／答えの承認に見られる未完結情報の完結要請・完結・その受け止め、iii) 既知情報の認定 (気づき) と未知情報の受け取りが含まれる。主観的方向づけは命題の真偽性へのコミットメントの強さ (intensity) (つまりは強意) などの情動的・主観的の反応からなる。この枠組みですぐに浮上する疑問は情動的・主観的発話態度は主観的方向づけのみに限定してよいかどうかである。客観的方向づけの類にも及んでいるのではないかということである。この疑問を詳細に検討する前段として、主観的方向づけの例から見ておく。

- (7) Debby: Well I think there's a lot of competition between girls. In an all girls school. More than well – more academically anyway.

Freda: Oh yes. Oh yes. They're better students I do believe that. (Schiffrin (1987: 95))

ここでの oh yes は、一般的に女子高校生にも切磋琢磨が見られ男子に劣らず優秀であるとする相手の意見に強意的に同意していることは明らかである。強めの度合いは oh yes の反復と強調の do によって高められている。主観性の作用が支配的な場合である。

対比的に、客観的方向づけの一つに位置づけられる修正の場合を取り上げてみる。(なお、以下

の引用例では、説明の便のために一部表記に修正を加えてある.)

(8) A1 Debby: Is there anyone you would uh: talk about –

B1 Jack: **Oh** you mean outside?

A2 Debby: Yeh outside the home.

B2 Jack: I wouldn't. (ibid.: 82)

(9) A1 Freda: Sometimes he got a notice for staying out past curfew. Recently. In August, that was.

B1 Val: **Oh** curfew? What's curfew?

A2 Freda: A certain time that children have to be in.

B2 Val: **Oh** your children. **Oh** I see. **Oh** it's personal. **Oh** I – I thought there might be police or something. (ibid.: 92)

一連の修正のプロセスは、修正対象となる発話の提示(A1)、修正(明確化)の要請(B1)、修正の提供(A2)、修正の編入(B2)の順に進行する。oh が現れるのは B1 と B2 においてである。つまり、相手の発話の不明瞭さや難解さに気づいてそれを問いただすときと、相手の修正によって問題が解消したことを認定し正しい情報を自分の発話に新たに組み込むときである。なお、oh は修正の提供(A2)では現れないと観察されている。修正の提供に比べて修正の要請と編入は発話処理の負担が重くなるためであるという。Schiffirin の考えで問題にしたいのは、修正の B1・B2 段階での oh の随意性である。事実、oh は(9)では両段階で現れているが、(8)では B1 のみに現れている。他の要因も関与している可能性もあるが、基本的に oh の使用は随意的である。したがって、状況によっては、(8)の(B1)では顕現せず(B2)で顕現することもありうるし、両位置に出現することもありうる。Schiffirin の調査によれば、総体的に、oh 対ゼロ形の使用率は B1 では 30:70%、B2 では 41:59%であるという。両者をならしてみても、oh はけっして優位ではなく、むしろゼロ形が無標となっている。

oh の使用が随意的であるからといって、むしろ oh とゼロ形の発話の表示内容が等価であるわけではない。両者の違いが情動性・主観性にあることは容易に見て取れる。(9)について言えば、(B1)の修正要請は、相手の発話に含まれている

curfew の意味をおそらくは非常事態下における「外出禁止令」のように捉え、「子供の門限」のような軽い意味には(アメリカ英語のためもあってか)思い至らなかったことによるものである。(B1)の oh を動機づけているのは解釈不能な語に出会って<狼狽>している心的状態である。そのような特別な感情が伴わなければ oh は無用である。また、(B2)の oh は、疑問が解けた後の<納得>・<感心>などの肯定的感情を狼狽の大きさに比例する形で強めに表出している。ここでの文脈では oh は不可欠な要素であろう。(8)における(B1)の oh は相手の舌足らずの質問に軽く<不服>・<戸惑い>を表していると解せる。対話者としての確な返答をしたいと望むのであれば、相手の質問の不明瞭箇所を見過ごすわけには行かない。oh の表示する不服・戸惑いは実際には軽度なものであろうが、あえて oh を登場させることによってやや深刻なものであるように装っていると思われる。ここでの oh の使用は少し演出が加わっているように感じられる。

Schiffirin の枠組みでもう一つ指摘しておかなければならない問題点は、発話提示の精彩の無視である。情報管理理論では、主観的方向づけであれ客観的方向づけであれ、発話の生き生きした物言いの表情は捨象されている。したがって、そのような表情が鮮明に見てとれる(7)や(9)のような場合であれ標準的な(8)のような場合であれ、ことさらその存在に言及されることはない。しかしながら、oh 発話の表示は、根底にある気づきの対象とそれに伴う情動性・主観性をどのような表情で言述するかで全きものになる。両者は相乗して表現効果を上げているのである。

次に、第三の特徴的な先行研究として Heritage (1984)<sup>[13]</sup>を取り上げておく。Heritage は oh を分析するにあたって主観的要素を徹底的に排除している。Schiffirin に含まれていた主観的方向づけさえも放棄し、客観的方向づけのみに着目している。oh は次のように規定される。

(10) [T]he particle is used to propose that its producer has undergone some kind of change in his or her locally current state of knowledge, information, orientation or awareness. (Heritage 1984: 299)

oh は発話時における知識などの内的状態の変化結果を表示するものとみなされている。一つの場

合として、次のような質問>答え>承認の連鎖を観察してみよう。(なお、表記はわかりやすさのため、原表記を通常の綴り字表記に改めた。また、<a>~<d>は連鎖ユニットの区別を示す。)

- (11) <a>N: Does he have his own apartment?  
 <a>H: Yeah.  
 <a>N: Oh!  
 <b>N: How did you get his number?  
 <b>H: I called information in San Francisco!  
 <b>N: Oh.  
 N: Very clever.  
 H: Thank you. I—  
 <c>N: What's his last name?  
 <c>H: Uh, Freedland.  
 <c>N: Oh.  
 H: Freedland.  
 <d>N: Nice Jewish boy?  
 <d>H: Of course.  
 <d>N: 'f course.  
 H: Hnh.  
 N: Nice Jewish boy who doesn't like to write letters? (ibid.: 310)

ここでは四つの連鎖が埋め込まれている。最後の連鎖を除いて承認位置に oh が現出している。これは、明らかに相手の答えによって質問者の知識状態が変化したためである。最後の連鎖で oh が言い控えられているのは、最終的に質問者の知識状態は変化しなかったものとして提示しているからであるという。質問者の最初の意図は問題の人物が好感の持てる少年かもしれないという自分の推論の可否を確認することにあっただけであるが、相手の Of course という答えを受けて姿勢を変え、遡って実は聞くまでもない自明なことをコメントしただけの発話として受け取ってもらってよい旨を伝えているためであるという。(この説明には議論の余地があると思われるが、ここでは立ち入らない。) oh は認知状態の変化表示機能に加えて、相手の答えが十分な情報を伝えており完結しているとみなしていることを表示する機能をももつと言う。結果的に、oh は(とりわけ独立形では)連鎖を締めくくる役割を果たす。Heritage の提唱する知識状態の変化と完結性の認定は、oh の客観的な表示内容としてはおおむね妥当なものであろう。しかし、oh の<興奮>成分はすっかりふり落とされてしまっている。質問者は、単に相

手の答えによって新鮮な知識状態を得、認知的に満たされただけではないであろう。そのことが感情的に重要な意味をもつ(例えば<驚き>・<感心>・<感嘆>を引き起こす)ことに気づき、その興奮を生き生きと伝えているであろう。情報のやり取りを単なる機械的なプロセスとしてではなく感情的出来事として位置づけようとするのが oh の表現スタンスである。(11)に戻って言えば、そもそもこのような短い会話断片に oh が頻出するのはなぜであろうか。また、矢つぎばやに出される質問は何を反映するものでであろうか。すべては談話主題である「少年」への質問者の強い<関心(好奇心)>に由来するものでであろう。この少年についての情報に通じているのは相手であるから、的を絞った質問を次々に投げかけて相手から興味ある情報を手っ取り早く引き出すことが肝要となる。また、こうして得た情報はしばしば感情的インパクトをもつものでもであろう。このように、oh には必ず主観性が内在するのであり、客観的表示内容は主観の作用因であると見るのがもっとも理にかなっていると思われる。

### 3. 気づき・気づかせ標識としての oh

すでに述べたように、本論では、oh 発話の特性は、i) 発話時における話し手の認知状態への気づき、ii) 気づきの対象を成す発話を情動的に意義が高いものとみなす発話態度、iii) 発話提示の「生き生きとした」様態にあると見ている。前節では、この特性を顧慮しない先行理論が記述的妥当性を満たさないことを論証した。以下では本論の見方を展開する。

単刀直入に、oh の三つの特性を組み込んで定式化すれば次のようになる。

- (12) i) I say lively that I am aware that the Utterance (U) is Affectively-Relevant (A-R).  
 ii) I say lively that I have just become aware that the Utterance (U) is Affectively-Relevant (A-R).

主節は発話提示の精彩(「生き生きとした」様)を表し、すぐ下の埋め込み節は気づきを、さらに下位の節は気づきの中身である発話態度を表している。発話態度は、厳密には、気づきの対象を成す発話が情動的に関連的である(情動的関連性をもつ)とする判断を指す。また関連的とは、ごくかいつまんで言えば、情報内容が場面に適切で情

報価値が高いことを表す (Sperber and Wilson (1986) [15]; 河野(2011) [7]参照). したがって, 情動的関連性は情動面から見た関連性ということになる. また, i)は話者自身の内発的気づきを, ii)は相手の働きかけによる誘発的気づきのモードを表す<sup>1</sup>. 具体例で見ておこう. 最初は内発的気づきの場合である.

(13) *Oh, here comes the car.*

この例では, oh は事態の出現を伝える発話 U (=Here comes the car)を包み込んでいる. 注目の車 (例えば貴賓車)の現れへの気づきを伝えるのが U である. oh はこの U が情動的関連性をもつこと, 具体的には今生じている<興奮>の原因になっていることの認識に気づいたことを表すものである. 特に注意すべきは, oh の気づきの対象は情動的関連性判断であって, 事態の出現そのものではないことである<sup>2</sup>. 事態の出現への気づきの表出はすでに U によって果たされている. oh に固有のこの一段高次の気づきが「生き生きと」述べられていることは言うまでもない. 次に誘発的気づきの場合を見ておきたい.

(14) A: What's your family situation?

B: *Oh, you mean whether I'm married or not?*

(14B)は発話の修正を意図したものであり, 相手の発話の不明瞭さを取り除くための確認を表示している. oh を冠して, この修正要請の U (=You mean whether I'm married or not?) が感情の次元で重要性を帯びていること, 現に相手の奥ゆかしい問い方への<快感>・<感心>につながっていることの認識に気づいたことが伝えられている. 考えてみれば, この誘発的気づきは実は相手の発話によって気づかされたものである.

実のところ, oh の表示内容は(12i)・(12ii)では尽きないと思われる. oh には話し手の気づきを伝えるのみか聞き手への気づかせも随伴していると判断される. 次のようにしてである.

(15) I say lively that you should be aware that the Utterance (U) is Affectively-Relevant (A-R).

すなわち, 相手も発話 U が情動的関連性をもつことに気づくべきである, さらに気づいて欲しいと快活に述べることである. つまり, 話し手の気づきを相手と共有したいと望む発話態度である. oh 使用場面から醸し出される話し手と聞き手の一体感のような気分は, (15)のような相手へのまなざしがあるからではなかろうか. ちなみに,

Bolinger (1989<sup>[5]</sup>: 266)は oh に「明るさ」(lightness)・「愛想の良さ」(agreeableness)・「社交性」(sociability)のような属性を付与しているが, これらは本論の「生き生きした」(lively)発話態度とそれを組み込んだ(12i)・(12ii)と(15)の総体的な表示内容に包摂されるべきものとみなせる. 気づき・気づかせの相乗効果が容易に見て取れるのは, 例えば次のような<制止>の発話においてである.

(16) *Oh, don't touch that switch!*

oh のおかげで制止発話の強制力はかなり緩められる. そのわけは, oh によって, 制止発話が<危機感>・<苛立ち>・<当惑>などの場面的に際立った感情との結びつきをもつことで情動的意義があると判断され, それへの気づき・気づかせが連携して提示されるからである. 制止発話はむきだしのままでは有無を言わせぬ無礼な言になるが, 話し手・聞き手の双方が発話の情動的な基盤ないしは根拠に注意を向けることで発話が迂回し聞き手には受け入れやすいものとなる<sup>3</sup>.

### 3.1. 内発的気づき・気づかせの oh

この節では, 内発的気づき・気づかせ標識としての oh の生態をつぶさに観察する. oh が関与する内発的気づき・気づかせの類には, 大まかに談話の切り出し, 強意の二種がある. 以下, この順で議論する.

#### 3.1.1. 談話の切り出し

まずは, 談話の切り出しと関わる oh である. 談話の切り出しは話題の導入と重なる. 新たな事態の出現に気づきそれに言及するのは話題の導入となる. 事態には知覚される外的出来事・状態も認知される内的なものも含まれる. 前者の例はすでに(13)で見たので繰り返さない. 後者の例は想起や理解・認識に関わるものである.

(17) Hang on, I've forgotten someone. *Oh yeah, Professor Snape.* (A, p. 251)

(18) 'Who's there?' Hagrid called. 'Show yourself – I'm armed!' . . . 'Oh, it's you, Ronan,' said Hagrid in relief. 'How are yeh?' (A, p. 273)

(19) 'Oh!' Bastian cried. 'I thought you had turned to stone.' 'So I had,' the lion replied. 'I die every nightfall, and every morning I wake up again.' (B, p. 231)

(20) ‘Difficult. Very difficult. Plenty of courage, I see. Not a bad mind, either. There’s talent, *oh* my goodness, yes – and a nice thirst to prove yourself, now that’s interesting . . . So where shall I put you?’ (A, p. 133)

(17)は「石」を盗み出した犯人が誰かを推測する中でたまたま見落としていた人物を今思い出したという状況である。oh を含む発話の省略を復元すれば Oh yeah, I’ve forgotten Professor Snape となり、そのうち oh を除いた部分 Yeah, I’ve forgotten Professor Snape が判断対象の U となる。oh は、この U が今起こっている想起に伴う〈喜び〉との関連で情動的な重要性をもつことへの気づきを伝えている。(なお、最初の発話に含まれる hang on も気づきを表しており、oh 発話への誘導を果たしている。) (18)は、暗がりでごめく生き物の正体が実は顔見知りの人物であったことが分かった状況である。U (=It’s you, Ronan)は〈安堵感〉と結びつけて関連性が評価されている。(なお、クイズの答えが分かった場合の Oh, I know.なども同種であるとみなしてよい。) (19) は、ライオンの前足の間で眠りこんでいた話し手が、目覚めて発した言葉である。最初ははっきりライオンが石になっていると思っていたが実は勘違いであることに気づいた状況である。〈意外感〉と連動しているのは明らかである。(20)は「分類帽子」が判断の思案中に発したつぶやきの言であり、〈喜ばしげな迷い〉がありありしている。判断の要因の一つである talent が場面に登場したことが there 構文で提示されている。以上は事態の出現に話し手が気づく場合であったが、さらにはそれを相手に気づかせる場合も oh の作用自体は不変である。

(21) ‘. . . Will the roof bear? – Mind that loose slate – Oh, it’s coming down! Heads below!’ (a loud crash) (C, p. 29)

屋根の上の作業を下から眺めている人たちに向かって、突然落下してきたスレートに注意するように警告している場面である。U (=It’s coming down) は相手に気づかせる事柄であるが、oh は同じ図式で(ここでは〈恐れ〉・〈危機感〉と結びついた)情動的関連性判断への話し手の気づきを伝えている。このように、oh の基底にある U の内実は無際限であり、またそれと連動する感情は場面によって様々であるが、oh の表示は一貫している。

話題の導入が相手の知識状態を尋ねる形をとることがある。次の例を参照。

(22) B: *Oh* you know, do you remember Yvonne saying that that plant down there was a money plant and I didn’t know what it was called? A money tree.

A: Aha! I recognize a bit, yes. Go on. Why?

B: The first I’m just reading about

A: Mm?

B: Well the first houseplant I ever bought was a money tree. An attractive succulent.

A: Mm.

B: Well that’s it. (D)

これから話題にしようとしている風変わりな名前の植物の a money plant (tree) (「ギンセンソウ」)を相手を知っている(記憶している)かどうかを確認しつつ、できれば共有知識を話題に設定しようとしていることがうかがえる。

相手の注意を促す look や listen, さらに呼びかけ表現なども話題の導入に先立って認知(知覚)の態勢を整えさせるものと言える。

(23) *Oh*, look. I think that’s Harry over there. (E)

(24) *Oh* listen, I forgot to ask you what your father did when you were growing up. (Schiffrin 1987: 85)

(25) She dropped Crookshanks onto Seamus’s empty bed and stared, open-mouthed, at the Firebolt. ‘*Oh*, Harry! Who sent you that?’ ‘No idea,’ said Harry. ‘There wasn’t a card or anything with it.’ (F, pp. 166-167)

(23)の look と(24)の listen はそれぞれ視覚、聴覚への前駆的な注意の喚起であり、(25)の呼びかけ表現は一般的な注意の喚起である。(25)の呼びかけは、けたはずれに高価なクリスマスプレゼントである魔法の杖 Firebolt の送り主は誰かの問いへの前置きである。

### 3.1.2. 強意

oh 発話に置かれた強意は、U の表す事態がきわめて高い情動的関連性をもつことの思い入れを込めた形象化である。様々な強意は注目すべき事態の局面に様々な角度からハイライトを与えるものである。以下、oh と関連する様々な強意形式を検討する。

## i) 感嘆

感嘆文は内在的な情動的強意形式であり、ohと実によくなじむ。

(26) How many men that she knew would have done such a thing. *Oh*, how extraordinarily nice workmen were, she thought. (G, p. 288)

(27) ‘*Oh*, my adored Oglamar! How you must be suffering! But never fear, your knight is coming, he is on his way....’ (B, p. 276)

(28) “Mother, a man’s been killed,” began Laura. “*Not* in the garden?” interrupted her mother. “No, no!” “*Oh*, what a fright you gave me!” (G, p. 293)

(29) ‘*Oh*, what a parcel!’ cried Ethel. ‘For me! What can it be! Greek stamps. This is most exciting!’ (H, p. 89)

感嘆文の中核をなす wh-句では対象が主要名詞で、その属性が（しばしば評価的）形容詞で、様態・程度が副詞で表される。特に属性・様態・程度が感情的判断とつながりやすいと言える。(26)では程度副詞 *extraordinary* を伴って属性が期待を大きく超えていることが述べられている。(27)では感嘆詞 *how* のみが顕現しているが、*greatly/badly* などが伏在している。(28)では対象と属性が属性名詞 *fright* 一語に融合している。(29)では属性の正体は場面に依存して暗示されており、これが最後の発話で締めくくられる事態全体のわくわく感の源泉となっていることが見える。

## ii) 程度

感嘆文と共通に、事物・事柄の属性や様態の程度の際立ちは感情に響きやすい。

(30) . . . [A]nd I’m sure I can’t be Mabel, for I know all sorts of things, and she, *oh*, she knows such a very little! (C, p. 15)

(31) There lay a young man, fast asleep – sleeping so soundly, so deeply, that he was far, far away from them both. *Oh*, so remote, so peaceful. (G, p. 298)

(32) ‘*Oh*, my dear’, he groaned at last, ‘how can you be so cruel?’ ‘I can’t help myself, Dirk’, she answered. (I, p. 101)

(33) “. . . The bodies of Maia Rhomaidēs, the aged proprietress, and of her daughter, aged forty-six, were easily recognizable, whereas that of her

grandson” – *oh* the rest is really too horrid . . . (H, p. 89)

(34) ‘*Oh*, it is a place in a thousand!’ she cried, ‘I could live and die here! . . .’ (H, p. 83)

(30)の *such* や(31)・(32)の *so* は、本来 *as that* のような比較を基礎に置いており、「事実そうであるその程度に」の意を伝える。(30)では *such* の内側にさらに *very* が生じている。(32)では、「どうしたらそんなに残酷になれるの?」と *how can* の疑問で包み込んで *so* 句をさらに強めている。実質的に、*You are impossibly cruel* と同意を伝えている。(33)では、程度の副詞 *really* と *too* が積み重ねて使われている。(34)は比率に基づく程度表現であり、「千に一つの」(景勝地)の意が誇張表現として表されている。

## iii) 事実性／肯定

強調の強勢を帯びる *do* (助動詞) や *be* (助動詞・繫辞) によって事態の事実性ないしは肯定が強意的に提示される。

(35) “*Oh*, I do love parties, don’t you?” gasped Laura. (G, p. 288)

(36) With that she picked up a watering can that was on the floor beside her, held it over her head, and sprinkled herself. ‘*Oh!*’ she said. ‘That is refreshing!’ (B, p. 401)

さらには、*it* 分裂文や文副詞(離接詞)の *indeed* なども事実性を際立たせる役割をもつ。

(37) ‘The game’s going on rather better now,’ she said, by way of keeping up the conversation a little. ‘’Tis so,’ said the Duchess: ‘and the moral of that is – “*Oh*, ’tis love, ’tis love, that makes the world go round!”’ (C, p. 68)

(38) “Give us that [ring], Deagol, my love,” said Smeagol, over his friend’s shoulder. “Why?” said Deagol. “Because it’s my birthday, my love, and I want it,” said Smeagol. “I don’t care,” said Deagol. “I have given you a present already, more than I could afford. I found this, and I’m going to keep it.” “*Oh*, are you indeed, my love,” said Smeagol; and he caught Deagol by the throat and strangled him, because the gold looked so bright and beautiful. (J, p. 70)

(37)の *it* 分裂文では、*that* 節を前提とし、*is* の後の *love* を焦点として事実性を浮き立たせている。

(38)の *indeed* は事態 (相手のことば・態度) が実際にそうであると気づいたことを原義に含んでおり, 指輪を渡すのを拒んでいる相手に *oh* 発話全体で「おお, そうかい, その気なんだな?」とく当惑の情を伝えている。

iv) 否定

否定の強化手段には次のようなものが含まれる。

(39) ‘Then you do it to please her?’ ‘Why not?’ said Bastian. ‘What’s wrong with that?’ Xayide let some green smoke rise from her mouth. ‘*Oh*, nothing at all, my lord. How can anything you do be wrong?’ (B, p.337)

(40) Then I thought of the children. ‘It must have been very difficult to explain to Robert’ I said. ‘*Oh*, I never said a word to either of them . . .’ (I, p. 33)

(41) *Oh* no, not for anything in the world would he have parted with that jewel. All he wanted was to go on reading, to see Moon Child again, to be with her. (B, p. 170)

(39)の該当部分の省略を補填すれば *Oh, nothing at all is wrong with that, my lord* となるが, *at all* は *nothing* に含まれる否定要素を強めている。後続発話は修辭疑問文の形で *Nothing you do can be wrong* といった先行発話と同趣旨の意味を伝えている。(40)では, *never* が強意副詞であり, さらに否定の作用域内の最小単位の表現である *a word* は *even a word* の意を伝えている。(41)では, 否定倒置構文を用いて否定を強めている。「この世のいかなるものと引き換えても～することはない」の意味である。

v) 好ましさの評価

事物や事態が好ましいものか否かの評価は強意に流れやすい。

(42) Hermione was examining her new timetable. ‘*Ooh*, good, we’re starting some new subjects today,’ she said happily. (F, p. 76)

(43) ‘Arithmancy looks terrible,’ said Harry, picking up a very complicated-looking number chart. ‘*Oh*, no, it’s wonderful!’ said Hermione earnestly. ‘It’s my favorite subject! It’s –’ (F, p. 185)

(44) Involuntarily Bastian looked up at the skylight,

trying to imagine how it would be if Falkor came cutting through the darkening sky like a dancing white flame, if he and Atreyu were coming to get him. ‘*Oh* my,’ he sighed. ‘Wouldn’t that be something!’ (B, p. 126)

(45) ‘Go away, Ginny,’ said Ron. ‘*Oh*, that’s nice,’ said Ginny huffily, and she stalked off. (F, p. 59)

(46) ‘But if *we*’re with him,’ said Ron spiritedly to Hermione, ‘Black wouldn’t dare –’ ‘*Oh*, Ron, don’t talk rubbish,’ snapped Hermione. ‘Black’s already murdered a whole bunch of people in the middle of a crowded street, do you really think he’s going to worry about attacking Harry just because *we*’re there?’ (F, p. 62)

(47) Peeves seemed to be bouncing along the corridor in tearing spirits, laughing his head off. ‘*Oh*, he’s horrible,’ whispered Hermione, her ear to the floor. (F, p. 304)

(42)~(44)は好ましいと評価される項目を含む例であり, (45)は一見そのように見える例である。一方, (46)・(47)は好ましくないと評価される項目を含む例である。(42)の *good* は事態を歓迎する趣旨の間投詞であり, さらには *new* にも (少なくともこの文脈では) 肯定的評価が与えられている。(43)の *wonderful* は, 相手の感想とは逆に, 話題の科目が素晴らしいものであることを伝えており, (44)の *something* は空想的事態が瞠目すべきものであることを述べている。(45)の *nice* は相手にすげなく追い払われたことに皮肉を込めてコメントしたものである。(46)の *rubbish* (「愚かなこと」(を言う)), (47)の *horrible* (「ひどく嫌な」(やつ)) は明らかに否定的評価を内在している。

vi) モダリティ

モダリティは発話態度を表す範疇であり, 「推量」(認識様態的法), 「義務」・「許可」(義務的法), 「能力」・「意志」・「可能性」(動的法) などを表わし分ける。

(48) ‘Are you really Harry Potter?’ Ron blurted out. Harry nodded. ‘*Oh* – well, I thought it might be one of Fred and George’s jokes,’ said Ron. (A, pp. 109-110)

(49) She finally lowered them [her hands] to say, ‘Sirius Black escaped to come after you? *Oh*,

Harry . . . you'll have to be really, really careful . . . ' (F, p. 60)

(50) 'Oh, Mum, can I go on the train and see him, Mum, oh please . . . ' (A, p. 108)

(51) Ron's face was as red as his hair. 'Say that again,' he said. 'Oh, you're going to fight us, are you?' Malfoy sneered. (A, p. 120)

(52) I'll tell everyone about the flowers and the music and Professor Hora and everything. Oh, I just can't wait to see them all again! (K, p. 172)

(53) 'We attacked a teacher . . . we attacked a teacher . . . ' Hermione whimpered, staring at the lifeless Snape with frightened eyes. 'Oh, we're going to be in so much trouble -' (F, p. 265)

(48)の might は確信度の低い「推量」を表しており、Harry が列車に乗り合わせているというのはそもそも信じがたいことであり、その噂はひょっとして仲間の冗談かもしれないと思ったと述べている。(49)の have to は「義務」を表し、相手に迫りそうな身の危険を避けるためになすべきことを思いやって助言している。(50)の can は「許可」を伝え、please と連動して願いを聞き入れて欲しいとせがんでいる。oh の反復にも注目したい。(51)の are going to は「意志」を表し、「戦う気だな？」と嘲っている。(52)の can't は「可能性」を伝え、否定を伴ってはやる気持ちを述べている。(53)の進行形は「未来の予測」(半ば推量)を表出し、迫り来る困難に不安を抱きつつ述べている。

#### vii) 願望

そうであって欲しいと望むことは、その性質から言って感応しやすい。

(54) Oh, how I wish I could shut up like a telescope! I think I could, if I only knew how to begin. (C, p. 10)

(55) Oh, if only one child of man would come, Oh, then at last the thing would be done. (B, p. 118)

(56) Oh, to be away from this! She actually said, "Help me, God," as she walked up the tiny path and knocked. To be away from those staring eyes, or to be covered up in anything, one of those women's shawls even. (G, p. 297)

(54)では、感嘆文の枠の中に仮定法過去で表されるほぼ実現不可能な事柄への願望が述べられている。(55)では、仮定法過去の条件文の中で条件節は「人間の子供が来てくれさえすれば」としているが、そのようなありえなさそうな事態が出現することを実は切に望んでいることが感じ取れる。(56)では、不定詞句で「できることならこの場から逃れたい」と強い願望を吐露している。視線にさらされることが耐えがたいからであることがすぐ後で明かされる。

#### 3.2. 誘発的気づき・気づかせの oh

この節では、相手の発話を受けての誘発的気づき・気づかせ標識としての oh のふるまいを詳しく観察する。oh が関与する誘発的気づき・気づかせの類には、大まかに相手の発話の不備、自分の認知状態の変移・相手との認知的差異、相手の発話の情報値の高さの三種がある。これらの特性を論述する前段として、まず会話の基本的談話単位の構造を規定しておきたい。

話し手と聞き手によって繰り広げられる談話の最小単位の構造型には三種を設定しておく。主題的陳述 (Topical Statement (TS)) > 評言 (Comment (C)), 質問 (Q) > 答え (A), 質問 > 答え > 評言の三つである (Heritage (1984) [13]; Schiffrin (1987) [12]; Schegloff (2007) [17] 参照)。発話者と発話順序を加えて示せば次のようになる (カッコ内はサンプルの発話)。

#### (57) 基本的談話単位の構造型 [1]

I. A1: TS [You look exhausted this morning.]  
B1: C [Oh, I couldn't sleep a wink last night.]

II. A1: Q [How are you?]  
B1: A [Oh, miserable! I couldn't sleep a wink last night.]

III. A1: Q [What are you excited about?]  
B1: A [Oh, I bought a new guitar. It's Sakurai's precious jubilee model.]  
A2: C [Oh, sounds gorgeous!]

(I)は主題導入の陳述に何らかの評言が提示されるものである。(II)は質問と答えのペアからなるものである。(III)は(II)を拡張して、答えに対する質問者の評言が加えられたものである。なお、(II)の答えにはさらに随意的に返答者自身の評言が加えられることもある。また、(I)・(III)の評言には

さらに相手の評言が加えられ、さらにこのプロセスが反復されることがある。一つの主題について段階的・累積的に展開する評言の場合である。このようにして、TS ないしは Q が生起するたびに新たな談話単位が築かれることになる。談話の構造型には、さらに(I)・(II)の拡張型として、挿入的な Q>A (以下 Q>A' と表記) が割り込む形がある。

(58) 基本的談話単位の構造型 [2]

IV. A1: TS [You look completely useless this morning.]

B1: Q' [What do you mean?]

A2: A' [You look so tired.]

B2: C [Oh, I was almost sleepless.]

V. A1: Q [Do you think you're useful this morning?]

B1: Q' [What do you mean?]

A2: A' [You look so tired.]

B2: A [Oh, I was almost sleepless.]

挿入的な Q' は相手の発話の不適切さを正すもの(修正の要請)であり、A' は元発話者によるその適切化(修正)である<sup>5</sup>。相手の発話が自分にとって不明瞭であっては会話を的確に進めることはできないわけであり、まずはそれを解消する必要がある。そのような軌道修正の後に、それまで見送られていた C ないしは A が提示される段取りとなる。

3.2.1. 相手の発話の情報価の際立ち

相手の発話の情報価の際立った高さが誘因となって oh が生ずることがある。ここでの相手の発話とは、一つは先に見た談話の構造型(I)・(II)・(III)における Q または TS を指す。またもう一つは同じ構造型の A または C を指す。いずれも相手の印象的な発話に対抗して主観的に応じようとする表出態度である。それぞれの役割を担う相手の発話は当然それ相応の情報価を有してはいるが、oh によって主観化されるためには受け手にとってとりわけ重要に思えるインパクトの強い内容でなければならない。以下、まずは相手の Q または TS の情報価の際立ちに呼応した oh を具体例で検証しておきたい。

(59) 'I've still got the pieces [of the wand], though,' he added brightly. 'But you don't use them?' said Mr Ollivander sharply. 'Oh, no, sir,' said Hagrid

quickly. (A, p. 120)

(60) 'We might dine together. You owe me a dinner, you know.' 'Certainly. Are you alone?' I flattered myself that I had got in that important question very naturally. 'Oh yes. In point of fact I've not spoken to a soul for three days. My French isn't exactly brilliant.' (I, p. 39)

(61) 'Tell me,' he said as they walkd on, 'do you like riddles?' 'Oh, yes very much,' Momo said eagerly. 'Do you know any?' 'Yes,' said Professor Hora, smiling at her, 'I know a real teaser. Very few people can solve it.' (K, p. 137)

(62) '. . . d-don't know why you wanted t-t-to meet here of all p-places, Severus . . .' 'Oh, I thought we'd keep this private,' said Snape, his voice icy. 'Students aren't supposed to know about the Philosopher's Stone, after all.' (A, p. 244)

(63) 'I think,' said Hermione, 'that if we made it sound as though we were just interested in the theory, we might stand a chance . . .' 'Oh, come on, no teacher's going to fall for that,' said Ron. 'They'd have to be really thick . . .' (L, p. 169)

(59) の話題は、折れてしまっただけでいまだ威力を秘めた魔法の杖であるが、問題の Q は「折れた魔法の杖をまさか使う気ではないだろうね」と釘を刺しており、杖の持ち主にとっては極めて重要な質問内容であろう。oh を伴った返答は、問題を共有する会話参加者として、相手の不安を払拭しようとする協調的姿勢を伝えている。(60) の Q は、相手が恋仲の女性と一緒にいるのかどうかを暗に聞き出そうとしたものであり、答える側はわなにはまるわけには行かない状況である。探りとはぼけの騙し合いの中での巧妙なやり取りである。(61) の Q は、おそらくは相手が謎々に興味をもっていることを見通して問いかけたものであろう。事実その予測は当たって、謎々は大いに歓迎されている。Q は親密さを深める上で意味のある問いかけであったことになる。(62) では、密会の場面で、「事もあろうにわざわざこの『禁制の森』を選んだのはなぜか分からない」と TS を切り出しているが、生徒の目を避けたいからだったと釈明される。片方は面倒くささをあからさまに訴えており、他方はことの重要性こそ優先すべきだと暗にたしなめていることが感じられる。oh

はこのような緊張した空気の中で生じている。(63)は、禁帯出の本を借り出すためには先生の署名入りの許可証が必要で、借用の本当の事由がばれないようにするにはどうしたらよいか思案している場面である。事由が強力な魔法薬の実践的な製造法を知ることではなく、単なる知的興味にあるかのように見せれば先生の許可証がもらえるかもしれないと案が出されている。しかし、そんな浅知恵に騙されるほどとろい先生たちではないと一笑に付されている。共に周到な案を模索する中でのやり取りである。

今度は、話し手が投げかけた発話への返しとしての相手の A または C の情報価の際立ちに触発された oh を検討してみたい。典型例として相手の A の詳述化の要請を取り上げる。次の例を参照。

(64) ‘What d’you mean *your* Bludger? *You* made that Bludger try and kill me?’ ‘Not kill you, sir, never kill you!’ said Dobby, shocked. ‘Dobby wants to save Harry Potter’s life! Better sent home, grievously injured, than remain here, sir! Dobby only wanted Harry Potter hurt enough to be sent home!’ ‘Oh, is that all?’ said Harry angrily. ‘I don’t suppose you’re going to tell me *why* you wanted me sent home in pieces?’ ‘Ah, if Harry Potter only knew!’ (L, pp. 187-189)

Bludger に Harry が致命傷に至らない程度に負傷させるように仕向け、Harry を家に送還することを望んだだけと言う Dobby の説明に Harry は憤懣を呈している。そもそもなぜそんなことをするのかの肝心の理由が述べられていないからである。oh を伴った質問は相手の答え(説明)をさらに詳述化させる方向に導く。このような詳述化の要請の動機づけはひとえに相手の答えの重要性にあることは明らかである。

### 3.2.2. 自分の認知状態の変移・相手との認知的差異

相手の質問や答えによって受け手は認知状態の様々な相に気づかされることがままある。そもそも質問には予測や前提が含まれており、受け手はそれを踏まえて返答することが求められる。また、質問者が相手の答えを得てそれに反応する(談話構造型(III)の場合、質問者は相手から答えを引き出しさえすればそれで事足りるわけではない。

多くの場合、相手の答えが自分の認識にどのような効果をもたらしたかを表明しなければならないであろう。それが相手の返答の労に報いることでもあり、また会話のさらなる展開につながるからである。

#### i) 自分の認知状態の変移

相手の質問や答えの効果の一つは認知状態の変化である。これにはまったく新しい認識に導かれたり、認識が部分的に修正されたりすることが含まれる。

(65) ‘I brought you to Fantastica,’ said Atreyu. ‘I think I ought to help you find the way back to your own world. You mean to go back sooner or later, don’t you?’ ‘Oh,’ said Bastian. ‘I hadn’t thought about it. But you’re right, Atreyu. Yes, of course you are.’ (B, p. 279)

(66) ‘Are you really Harry Potter?’ Ron blurted out. Harry nodded. ‘Oh – well, I thought it might be one of Fred and George’s jokes,’ said Ron. (A, pp. 109-110)

(65)では、相手の確認の問いによって初めて自分の本来の世界への帰還に思い至ったことが述べられており、話し手の新たな認識が生まれたことを表している。(66)では、Q>うなずきによる非言語的 A>質問者による C の連鎖の中で、oh は C に生じている。Q は、相手が Harry Potter であることをすでに本人から明かされて知ってはいるが、信じがたさのあまり再確認したものである。Harry が列車に乗り合わせているという噂はひょっとして仲間の冗談かもしれないと思っていたという確信度の低い推量が、Harry 本人による(再度の)認定によって冗談ではないことが判明した事態である。

#### ii) 相手との認知的差異

質問は、自分にとっては未知だが相手にとっては既知だと想定される情報の提供を求める発話である。また、共有知識が前提として質問に組み込まれることがある。相手の知識状態は推測するしかないので判断は間違える可能性がある。読みと実際に落差が生じたことに気づいたときには、返答者はそれに言及しなければならない。具体例を見たい。

(67) Irene: How can I get an appointment t’go down

there t'bring my son on a tour?

Debby: **Oh** I didn't even know they gave tours!  
I'm not the one t'ask about it.  
(Schiffrin (1987: 86))

(68) Debby: You must know about P.H.E.A.A.?

Zelda: **Oh** I'm gonna apply for all that. Yes I do.  
I went to the counselor, yes. And she  
told me there are three forms to fill out.  
And we do it next year. So, I know all  
about that. (ibid.)

(67)では、「息子を学校見学ツアーに連れて行くのに何らかの予約をすることが可能だ」という前提の下に、どのように予約したらよいかを尋ねているが、返答者はそもそも前提の中核をなす学校見学ツアー行事についての知識がなく、尋ねられる資格がないと述べている。相手によって既知であろうと判断されたことが実は未知であった場合である。(68)では、直面している問題の解決にあたって、相手がまずは P.H.E.A.A.について知るべきではないかともちかけているが、実は返答者はそれについてはすでに知識を得ており、それに関わる行動を起こしていきえることが伝えられている。これは、相手によって未知ではないかと判断されたことが実は既知であった場合である。このような相手と自分の認知的差異への気づきは、少なく見積もってもちょっとした驚きのような感情のざわめきは引き起こすであろう。

認知的差異を引き起こす前提が相手（や他の話題の人物）の知識ではなく行為に関わる場合がある。次の例を参照。

(69) '... It's quite clear now that when I thought Charles was at his club he was with her.' I was silent for a moment. Then I thought of the children. 'It must have been very difficult to explain to Robert' I said. '*Oh*, I never said a word to either of them. You see, we only came up to town the day before they had to go back to school...' (I, p. 33)

(70) ... [A]nd it was with a little laugh that she spoke of the rush of dances to which her daughter, just out, was invited. I suppose I said a very stupid thing. 'Is she going into your business?' I asked. '*Oh* no, I wouldn't let her do that', Mrs Strickland answered. 'She's so pretty. I'm sure she'll marry well.' (I, p. 60)

(69)では、**oh** に引き継がれる切り出しの発話は You explained the matter to Robert といった前提を含んでいる。ここでの「事」とは父親が家族を捨てて女の下に走ろうとしていることを指す。Robert を含めた子供たちにはそのことはまだ一切話していないと前提は退けられている。認知的落差の表明のタイミングで **oh** が現れている。(70)では、質問者は相手の娘がいずれ何かの仕事につくであろうことを前提にして相手の営む商売に加わるかどうかを尋ねている。母親は高貴な生まれゆえに仕事をもつことを潔しとしない人物であり、娘には仕事などよりまずは結婚を望んでいる。前提は言下に否定されている。自分が誇りにしているわけでもないささやかな商売に娘を巻き込むなど論外という次第である。

### 3.2.3. 相手の発話の不適切性

相手の話題導入や質問が十分意を尽くしたものであれば、それへの評言や答えによる応答は順調に進む。しかし、情報内容の不明瞭さや不十分さが見て取れたときにはまずはその解消が求められる。つまり、(58)で提示した基本的談話構造型の IV・V の場合である。割り込みの Q'>A'によって元の発話が修正され充足がもたらされた後に、初めて先送りにされていた応答が提示されることになる。具体的に観察してみたい。

(71) 'Blimey,' said the other twin. 'Are you -?' 'He is,' said the first twin. 'Aren't you?' he added to Harry. 'What?' said Harry. '*Harry Potter*,' chorused the twins. '*Oh*, him,' said Harry. 'I mean, yes, I am.' The two boys gawped at him and Harry felt himself going red. (A, p. 106)

(72) "Mother, a man's been killed," began Laura. "Not in the garden?" interrupted her mother. "No, no!" "*Oh*, what a fright you gave me!" Mrs. Sheridan sighed with relief and took off the big hat and held it on her knees. (G, p. 293)

(71)は、話題の人物である Harry を目の前にした少年たちが、間違いなく Harry だと確信しながらもあえて確認に及び、本人によって認定がなされるという場面である。今は二番目と三番目のペア発話は無視することとして、それ以降の発話に注目したい。Aren't you? のようにぼかした問いになっているのは、Aren't you Harry Potter? とはつきり聞きたいのが本音なはずであるが、自分たちの

名乗りもしていないのに高名な人物の名を口にするのを遠慮したためであろう。この情報不足は What?によって修正を求められる。相手の質問をつきかえすのは、自分にとって見過ごしがたい事柄が明示されていないからである。修正によって Aren't you Harry Potter?が意図された十全な質問であることが示される。この質問への答えは「君たちの目の前にいるのはまさにその Harry Potter, つまりは僕です。」と締めくくられる。目前の、またこれから先に向けられるであろう好奇のまなざしの中で、初めて自分自身の正体を明かすのは大きな出来事と言えるであろう。oh はそのような心理的重み（自覚）の中で発せられている。少年たちの感に耐えない表情を見ていささか気恥ずかしくなっているのもこの自覚の別の表れであると思われる。(72)は園遊会が開かれようとしている矢先に近隣の人物が落馬事故で亡くなったことを踏まえている。ここでの切り出しの発話はニュースの開始としては確かに少し漠然としている。主催者である母親にとっては、自分の庭園内で事故が生じたのであれば園遊会など論外となる深刻な事態である。したがって、この不明瞭性を正すのは差し迫った問題である。幸い事故が庭園内で起こったのではないことが伝えられ、母親はひとまず安堵するに至っている。明らかに、oh 発話の感嘆は「まさか庭園内ではないでしょうね?」という確認の発話の根底にあった不安・驚きと連動している。相手の発話に再考を促すこと自体がすでに客観的のみならず主観的にも重要な意義が込められているのであり、したがって相手の修正の言を得た上での応答もしばしば oh を伴った情動性の高い発話となる。

#### 4. 気づき・気づかせ標識としての ah

ah は、oh と同様に、気づき・気づかせ標識の感動詞であるが、oh とは質の異なる情感を表示する。oh は、前節で詳細に検証したように、つまりは衝動的・即応的な動的感情を表すのに対して、ah は感情に浸り味わう風の均衡のとれた静的感情を表す。核心に迫る第一歩として、James (1972)<sup>[10]</sup>の観察を眺めてみたい。

(73) a. Oh, you're leaving tomorrow!

b. Ah, you're leaving tomorrow! (James (1972: 163))

James によれば、oh も ah も対象となる事態にた

った今気づいたことを表し、さらに oh は驚きを伝えるが、ah は次のような内容を表示すると言う。

(74) "[A]h" indicates either that the speaker thinks that it is good that the addressee is leaving, or, at any rate, that he thinks the information is significant for some reason (for example, it might explain some recent unusual behavior on the addressee's part). (ibid.)

ah は、事態を好ましいものと受け取る態度を表すか、発話の情報内容が重要性をもつことの判断が提示されるかのいずれかであると提唱している。James の洞察を生かすには、ah が事態を奥行きのない単なる事態として提示するわけではなく、事態に解釈・評価を加えて表出するものとみなすことである。ah を伴って顕在化した事態は背景的想定（事態）と関連づけて解釈され評価されたりする。ah はそのような内省的プロセスを経て発せられるのである。したがって、(73b)に即して言えば、そのような事態を歓迎すべきものか回避すべきものかに関連した想定が先在していれば、実際に事態は好ましくもそうでなくも受け取られるであろう。また、相手の発話に接して、「そう言えばあなたは明日立つんでしたね」と相手と共有する事柄を想起する場合には、表出された事態は実は背景となる共有知識の解釈的表示を想起として提示したものである。後述のように、背景的想定は相手との共有知識にとどまらず、広く言語文化的に蓄積された共有知識に及ぶ。

本論では、ah は、oh と並行的に、次のような特性をもつものとみなす。

(75) i) I say contentedly that I am aware that the Utterance (U) is Affectively-Relevant (A-R).

ii) I say contentedly that I have just become aware that the Utterance (U) is Affectively-Relevant (A-R).

(75)と(12)を重ね合わせてみれば分かるように、ah と oh は抽象的な定式化のレベルでは最小対を成しており、述べ方が contentedly<満足の体で>か lively<生き生きと>かの対立があるだけである。つまり、ah も oh も発話が情動的関連性をもつことに気づいていることを主張するものである点是不変である。i)は話者自身の内発的気づきを、ii)は相手の働きかけによる誘発的気づきのモードを表す。ただ、式型には反映されていないが、ah においては発話の描く事態が背景的想定と関連づ

けて解釈され評価されたりすることに特に注意する必要がある。さらに、満足の体で述べる行為を根底で支えているのは、*<話し手が状況を適切に統御しており、さらに／またはそれにうまく順応している>*という実感にあると思われる。

ah の表示内容は、oh と同様に、(75i)・(75ii)のように話し手の気づきを伝えるのみか聞き手への気づかせも伴う。次のような形によってである。

(76) I say contentedly that you should be aware that the Utterance (U) is Affectively-Relevant (A-R). すなわち、相手も発話 U が情動的関連性をもつことに気づくべきである、さらには気づいて欲しいと満足感を抱きつつ述べることである。話し手の気づきを相手と共有したいと望む発話態度に由来するものである。

大まかに、ah には事態の出現の気づきを表す場合と、表出された事態を背景的想定と関連づけて表示する場合の二種類がある。以下、この順で議論する。

#### 4.1. 事態の出現の気づきの ah

事態の出現の気づきを表す ah は、特徴的に、理解の成立や事態との主観的一体化に関与する。

##### i) 理解の成立

人は、相手の発話や置かれた状況に触発されて新たな認識を得ることがある。事柄がそうであったのかと納得する場合である。これには、たとえ瞬時の出来事であれ不可分に内省的プロセスの跡づけが伴う。事例を眺めてみたい。

(77) 'I dare say you never even spoke to Time!' 'Perhaps not,' Alice cautiously replied: 'but I know I have to beat time when I learn music.' 'Ah! that accounts for it,' said the Hatter. 'He won't stand beating. Now, if you only kept on good terms with him, he'd do almost anything you liked with the clock....' (C, p. 54)

(78) 'Who are you?' 'My name is Bastian Balthazar Bux.' 'Ah, so you still know your name.' 'Yes. And who are you?' 'I am Yor; people call me the blind miner. . . .' (B, p. 417)

(79) One night, while Prince Girolama was sitting on the roof of his golden palace, playing checkers with the fairy whose blood was cold and green, he felt a little drop of moisture on his

hand. "Ah," said the green-blooded fairy, "it's starting to rain." "It can't be," said the prince.

"There isn't a cloud in the sky." (K, p. 49)

(77)では、本来意図された beat の意味の「拍子を取る」を曲解して「(人を) 打つ」としているが、いずれにせよ Alice が時間と仲が良くないのはそのような乱暴なことをするからだと解せた趣旨を述べている。認知プロセスを振り返りつつ、相手の発話から推論して事態の理解が得られたことが示されている。(78)も同様で、相手が自分の名前を正確に述べたことから推論して相手がまだ名前を(忘れずに)知っていることが分かったと伝えている。推論の過程が so で表されていることに注意したい。(79)は状況を踏み台にして新しい理解が成立した場合である。空から水滴が落ちてくれば、雨が降ってきたのだらうと思うのがプロトタイプの想定である。ah を冠した発話は推論の結果を表示している。(ちなみに、水滴は王女の涙であったことが後で明かされる。) 当然ながら、(77)~(79)は、共通してそれぞれの発話 U が情動的関連性をもつこと、具体的にはこの文脈では<充足感>や<感慨深さ>と結びついていることに話し手が気づいていること(さらには聞き手に気づいて欲しいこと)を満足の口ぶりで発話していることを表出している。

##### ii) 事態との主観的一体化

ah の気づきの様態には、さらに事態との主観的一体化がある。事態と経験者としての話し手の心理的距離がほとんど感じられない場合である。話し手は事態にどっぷり浸り、存分に味わっている状態である。いくつか例証してみたい。

(80) They were like bright birds that had alighted in the Sheridan's garden for this one afternoon, on their way to – where? Ah, what happiness it is to be with people who all are happy, to press hands, press cheeks, smile into eyes. (G, p. 295)

(81) Dumbledore conducted their last few lines with his wand, and when they had finished, he was one of those who clapped loudest. 'Ah, music,' he said, wiping his eyes. 'A magic beyond all we do here! . . .' (A, pp. 140-141)

(82) Mrs Weasley was marching across the yard, scattering chickens, and for a short, plump, kind-faced woman, it was remarkable how

- much she looked like a sabre-toothed tiger. ‘Ah,’ said Fred. ‘Oh dear,’ said George. (L, p. 34)
- (83) Momo sat up. ‘Ah, our guest is awake,’ Professor Hora said kindly. ‘I hope you’re feeling better?’ ‘Much better, thank you,’ said Momo. ‘Please excuse me for falling asleep on your sofa.’ (K, p. 210)
- (84) Percy and Ginny suddenly appeared behind Harry. They were panting, and had apparently taken the barrier at a run. ‘Ah, there’s Penelope!’ said Percy, smoothing his hair and going pink again. (F, p. 57)
- (85) The Slytherin team were looking very smug indeed, and none more so than Malfoy. ‘Ah, if only my arm was feeling a bit better!’ he sighed, as the gale outside pounded the windows. (F, p. 127)
- (86) The youngest boy tried to jerk out of the way, but she grabbed him and began rubbing the end of his nose. ‘Mum – geroff.’ He wriggled free. ‘Aaah, has ickle Ronnie got somefink on his nose?’ said one of the twins. ‘Shut up,’ said Ron. (A, p. 106)
- (80)では、幸せな人達と場を共にし、手や頬を触れ合ったり微笑みかけたりする幸せな事態に話し手は浸りきっていることが感嘆文に託されておりありとしている。(81)も同様に、音楽に秘められた魔力に聴く者が感涙を禁じえない情景が語られている。対象との分かちがたさの感覚が ah と oh を隔てている。oh は対象への働きかけが際立つ。(82)では、剣歯トラそっくりの母親の姿とふるまいを目にして、Fred は茫然自失に陥っている。同じ事態に接しての反応であるが、George は oh を用いてより直線的に呆れの感情を表している。(83)では、相手が目覚めている自明な事態にあえて「目覚めているんだね」といったように言及しているが、これも単なる事態への気づきではない、対象との一体感が根底にあると思われる。事態を共感すべき身近なものに受け止めていると言ってもよい。(84)は、駅のプラットフォームに集まっている生徒仲間の中に恋人である Penelope を見つけた場面である。察するに、少年は Penelope がいるその状況を好ましく思い、そこに自分も身を置きたいのである。この距離感のなさが ah の命と言える。(85)は、相手チームに勝つ自信は満々な

のだが、腕の調子がいまひとつなことを残念に思っている状況である。条件節では「ただ腕がもうちょっと調子よかったらな」とやや欲張った願望を述べており、そこに浸っている様を伝えている。願望はぎりぎりのところで絶望とは一線を画し、「不可能・困難ではあってもそうあって欲しい」と志向する肯定的心理作用であると思われる。(それがかろうじて<満足の体>の発話様態とつながっているのであろう。)(86)はアイロニーを込めたからかいの例である。「ロニーの鼻に何かくっついてるのかな？[反語的に]くっついてるよな！」とからかっている。本当は、兄弟のみともない格好に不快感ないしは違和感を抱いているのであるが、わざと同調しているかのように語っているのが味噌である。(80)~(86)のすべては、情動的関連性判断への気づき・気づかせの、満足感を伴った主張の中に取り込まれた個別の出来事であることは言うまでもない。

#### 4.2. 背景的想定との関連づけを伴う ah

ah には oh にはない独特の不透明さと含蓄がある。これは、ah が事態を単なる平坦な皮相的事態として提示するのではなく、事態に解釈・評価を加えて重層的に表出するためである。ah を伴って顕在化した事態は背景的想定(事態)と関連づけで解釈され評価されたりする。背景的想定は相手との共有知識にとどまらず、広く言語文化的に蓄積された共有知識に及ぶ。ah は、浮上した事態が実は人々によって広く支持されている普遍的な想定を反映していることを表すことが多い。そのような背景的想定には、粗い分類にすぎないが、一般的真理、常識、道理、規範、既成事実などが含まれる。以下検証してみたい。

- (87) Let me think: was I the same when I got up this morning? I almost think I can remember feeling a little different. But if I’m not the same, the next question is, Who in the world am I? Ah, that’s the great puzzle! (C, pp. 14-15)
- (88) ‘What a perfectly ridiculous idea. You must have known I was joking. Of course I meant I wished we could.’ ‘Ah! if we could only do what we wished!’ sighed Mrs Forman, already seated on her mule. ‘Surely,’ Ethel continued in calmer tones, ‘you didn’t think I mean it.’ (H, p. 84)
- (89) ‘Well, third-years at Hogwarts are allowed to

visit Hogsmeade, but my aunt and uncle didn't sign the permission form. D'you think you could?' Fudge was looking uncomfortable. 'Ah,' he said. 'No. No, I'm very sorry, Harry, but as I'm not your parent or guardian –' 'But you're the Minister for Magic,' said Harry eagerly. 'If you gave me permission –' 'No, I'm sorry, Harry, but rules are rules,' said Fudge flatly. (F, p. 40)

(90) 'I need hardly remind you,' said Guido, who was never at a loss for words, 'that Empress Harmonica was a contemporary of the celebrated philosopher Nauseous the Elder.' Understandably reluctant to admit his total ignorance of when the celebrated philosopher Nauseous the Elder lived, the sceptic merely nodded and said, 'Ah yes, of course.' (K, p. 44)

(91) . . . [A]nd Mrs Weasley took a flowerpot off the kitchen mantelpiece and peered inside. 'We're running low, Arthur,' she sighed. 'We'll have to buy some more today . . . ah well, guests first! After you, Harry dear!' And she offered him the flowerpot. (L, p. 49)

(92) 'And the Invisibility Cloak – do you know who sent it to me?' 'Ah – your father happened to leave it in my possession and I thought you might like it.' Dumbledore's eyes twinkled. (A, p. 322)

(93) Uncle Vernon made a funny rasping noise. 'I demand that you leave at once, sir!' he said. 'You are breaking and entering!' 'Ah, shut up, Dursley, yeh great prune,' said the giant. (A, p. 56)

(87)は、不思議な飲み物のせいで劇的に体が伸びたり縮んだりすることの奇妙さ・不可解さに翻弄されている状況での語りである。「自分とは何か?」という深淵で根元的な問いに立ち向かうのは子供の Alice にとってはしよせん手が届かない難問である。そうみなすのが常理であり、ah はそれを踏まえている。また、ここでの発話態度は、自分を完全に見失うことなく、かろうじて判断が下せていることのぎりぎりの自己満足感を伝えていると思われる。(88)では、(旅の逗留について)「できればいいと言ったつもりだった」という言

に「望み通りにことが運ばばこれほど良いことはないのだが」と返している。ままにならないのが世の常であることの真理を呼び起こしており、諦観をかみしめている風が感じられる。(89)では、校則が背景にある。学校活動への参加には保護者の承認が必要だが、Harry は叔母夫婦のいじめに遭ってそれが得られない状態にある。そこで、しかるべき地位にある Fudge に代理を依頼しているが、きっぱり断られている。校則に抵触するからであるという。Fudge は Harry に同情しつつも冷静に自分の立場を守っている。(90)では、常識が関与している。問題の著名な哲学者の生存年は常識とみなされているが、主体はたまたま無知であり、そのことを包み隠そうとしている。さも自信ありげに取り繕っている。(91)には礼儀作法が関わっている。夫人は特別な客人である Harry に花瓶に入った魔法の粉を優先的に提供している。ここで guests が総称的複数になっているのは通則を前面に押し出しているからである。(92)は、「それはこのような次第なのだ」と真相を相手に説いて聞かせる場合である<sup>6</sup>。真相は既成事実であり、話し手には既知な事柄である。相手に真相を明かすのは好ましさを含んだ肯定的感情となじむものである。(93)は、使命を帯びた巨人がやむなく Dursley 家に押し入り、抗議する Vernon を黙らせようとしている。ここでの ah は対決というよりはむしろ「黙るのだ!」といった風に諭しを表していると解される。「このような事態では、正当な要求である限り素直に受け入れるのが賢明なのであるからそれに従え」と暗に行動規範を想起させている。巨人は託されている権限を余裕の態度で、つまりは満足の体で相手に行使している。権限が与えられていなければ傲慢となるところである。

次に、ah と関連する背景的想定が相手との共有知識をなす場合を見ておきたい。

(94) . . . [H]e wanted to get started on his Anti-Dementor lessons as soon as possible. 'Ah yes,' said Lupin, when Harry reminded him of his promise at the end of class. 'Let me see . . . how about eight o'clock on Thursday evening? . . . ' (F, p. 174)

(95) 'Come in,' called Lupin. The door opened, and in came Snape. He was carrying a goblet, which was smoking faintly, and stopped at the sight of

Harry, his black eyes narrowing. 'Ah, Severus,' said Lupin, smiling. 'Thanks very much. Could you leave it here on the desk for me?' (F, p. 117)

(94)では、Lupin が Harry に Anti-Dementor の授業を与えることはすでに約束されており、Harry はそれを Lupin に思い起こさせている。Lupin は約束を忘れてはいないと答えている。約束はもちろん共有知識である。(95)は依頼と依頼の受諾・遂行の事例である。ゴブレットを持ってくるように依頼したのは Lupin であり、それを遂行しつつあるのは Severus Snape であるが、両者の間には依頼内容についての共通理解（共有知識）がある。したがって、Severus の登場は十分予測されたことである。ah は、(94)・(95)共に共有知識が橋渡しになって相手とやり取りしていることの充足感・安心感ないしは感慨深さにつながっていると思われる。

## 5. 結論

本論の議論の要点は次のようなものである。感動詞の中であって、oh と ah は事態が情動的に意義づけられる（つまり情動的関連性をもつ）ことへの話し手の気づきを特徴的に「生き生きと」ないしは「満足の体で」伝え、また相手にもその認識に気づかせようとする標識である。会話を交わす中で、発話内容や場面がとりわけ重要で印象的なものであると感じられれば何らかの感情が点火する。気づきを共有し、さらに感情のありかを常に透明にしておくことで会話参加者の親密な心理的つながりが築かれる。

情動的関連性判断の気づき・気づかせは内発的あるいは誘発的に生ずる。その判断には誘因が伴い、oh については、談話の切り出し、強意、相手の発話の情報価の際立ち、自分の認知状態の変移、相手との認知的差異、相手の発話の不適切性などが契機となる。ah については、事態の出現の気づき（理解の成立や事態との主観的一体化）、背景的想定との関連づけが関与する。

oh/ah は、基本的に発話の冒頭であって、後続発話全体を独自の仕方でも主観的に色づける。oh/ah はしばしば別の感動詞を包み込み、それにも規定通りの作用をもたらす。例えば、発話が十分な関連性をもたないことを表す well (Jucker (1993) [19] 参照)、事態が好ましいこと／好ましく

ないことを表す yes/no (河野 (2016) [20] 参照)、罵り語の shit や my God など (Aijmer (1987) [11]; Bolinger (1989) [5] 参照) との共起においても、それらを包含する形で oh/ah による主観化を行う。このように、発話の全体的な表情の鍵を握っているのはまさに oh/ah であると言ってよい。oh/ah が会話に頻出するのも首肯できる成り行きである。

## 謝辞

査読者から示唆に富むコメントをいただいたことに心からお礼申し上げます。

## 注

- 1 Jucker and Smith (1998) [16] は、本論の誘発的気づき・気づかせ標識と内発的気づき・気づかせ標識にほぼ対応するものとして receptive marker と presentation marker を設定し、oh を yeah や okay と共に前者に分類している。しかし、これは事実の半分を見落とした見方であり、実際は well などと同様に両面にまたがる標識と見るべきである。
- 2 本論では、oh/ah の気づきの対象はあくまで情動的関連性判断であって、事態の出現そのものではないと措定しているが、後述のように、James (1972) [10] は（未分析的に）まさに事態の出現そのものと考えていることに留意したい。
- 3 Bolinger (1989) [5]: 276) は、罵り表現においては、例えば Oh, shit!の方が直接的な Shit!よりも容赦されると観察しているが、これも(16)と同様の発話プロセスを経て緩衝効果が生じたものとみなせる。
- 4 Schegloff (2007) [17] の枠組みでは、基本的な談話構成単位は二つのターンからなる隣接ペアであると規定する。本論の(57)の I・II に相当するものであり、他には挨拶／挨拶、申し出・依頼・許可の求め／受諾・拒絶のペアなども含まれる。十分な長さの談話は、この中核的な隣接ペアの先行・中間・後続部分に他のターン（発話）が加えられた拡張形とみなされている。本論では、先行的隣接ペア・後続的隣接ペアも構造的には中核的隣接ペアと同様とみなす。導入的な先行的隣接ペアないしは展開的な後続的隣接ペアと中核的隣接ペアの区別は、位置の違いに加えてペア間の機能的関係にあると見る。なお、後続的拡張が一つのターンからなるものは本論の(57)の III に対応する。また、中間的拡張（つまり挿入）はすぐ後で述べる(58)の IV・V に当たる。

5 Schegloff (2007)<sup>[17]</sup>によれば、挿入には修正以外にも相手の質問に適切に答えるための前段的な確認のやり取りなどが含まれる。つまりは、一般化して言えば、挿入は求められている応答を一時的に保留し、適切な応答に到るのに必要な何らかの確認を行う Q>A である。

6 Aijmer (1987)<sup>[11]</sup>は ah well と oh well を対比してその違いを述べている。(なお、以下の例文では原典を通常の綴り字表記に直してある。また、出典は Svartvik and Quirk (1979)<sup>[18]</sup>を示す。)

(i) and President said ‘Ah well, the simple truth is that if you’re going to boil eggs communally, they must be hard. (1.3 796) (Aijmer 1987: 71)

(ii) a: Where did you go while you were there?

C: Oh well, only fairly locally, really. (2.7 1391) (ibid.)

(i)の ah well は<諦め>を表し、同時に要約機能をもつという。他方、(ii)の oh well は答えがさしたる重要性をもたないことを表すという。本論の見方では well が何らかの次元で、期待されている情報価値を満たさないことを表すものとしておくが、ah は話し手によって既成事実ないしは常理と思われる事柄(具体的には「共同で卵をゆでる際には好みの観点からは固ゆでにするのが無難」といったこと)を背景的想定にもっていることを反映しているとみなすのがよいであろう。(92)と同様、真相を相手に説いて聞かせる場合であり、そのように言い切ることが「要約」につながっているととも言える。また、さらに指摘しておきたいのは、oh well は第一義的に情報価値の低さを表すわけではないことである。それは答えの中心をなす U (=only fairly locally, really)が期待はずれの情報しか伝えていないからである。well は期待を満たさないことの予告の表示であり、oh は well を含んだ後続発話 U の軽い<口惜しさ>と連動した情動的関連性への気づきを述べているだけである。

## 参考文献

- [1] Ameka, Felix (1992) ‘Interjections: The Universal Yet Neglected Part of Speech,’ *Journal of Pragmatics* 18, 101-118.
- [2] Norrick, Neal R. (2007) ‘Interjections as Pragmatic Markers,’ *Journal of Pragmatics* 41, 866-891.
- [3] 河野武 (2017) 「ことばと感情：英語の間投詞」, 高見健一・行田勇・大野英樹 (編) 『中島平三先生退職記念刊行物』, 37-41, 開拓社, 東京.
- [4] Bolinger, Dwight (1986) *Intonation and Its Parts*, Stanford University Press, Stanford.
- [5] Bolinger, Dwight (1989) *Intonation and Its Uses*, Stanford University Press, Stanford.
- [6] O’Connor, J. D. and G. F. Arnold (1973) *Intonation of Colloquial English*, 2nd ed., Longman, London.
- [7] 河野武 (2011) 『関連性モダリティの事象：イントネーションと構文』開拓社, 東京.
- [8] 河野武 (2015) 「日本語イントネーションにおける上昇調の表示」『大妻女子大学紀要(文系)』47, 1-14.
- [9] 河野武 (2019) 「日本語における感動詞とイントネーションの交響：関連性モダリティの風情」『大妻女子大学紀要(文系)』51, 39-58.
- [10] James, Deborah (1972) “Some Aspects of the Syntax and Semantics of Interjections,” *CLS* 8, 242-251.
- [11] Aijmer, Karin (1987) “Oh and Ah in English Conversation,” *Corpus Linguistics and Beyond: Proceedings of the Seventh International Conference on English Language Research on Computerized Corpora*, ed. by Willem Meijs, 61-86, Rodopi, Amsterdam.
- [12] Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse Markers*, Cambridge University Press, Cambridge.
- [13] Heritage, John (1984) “A Change-of-state Token and Aspects of Its Sequential Placement,” *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, ed. by J. Maxwell Atkinson and John Heritage, 299-345, Cambridge University Press, Cambridge.
- [14] Schourup, Lawrence C. (1982) *Common Discourse Particles in English Conversation*, University Microfilms International, Ann Arbor.
- [15] Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- [16] Jucker, Andreas H. and Sara W. Smith (1998) ‘And people just you know like ‘wow’: Discourse Markers as Negotiating Strategies,’ *Discourse Markers: Descriptions and Theory*, ed. by Andreas H. Jucker and Yael Ziv, 171-201, John Benjamins, Amsterdam.
- [17] Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence Organization in Interaction*, Cambridge University Press, Cambridge.

- [18] Svartvik, Jan and Randolph Quirk (eds.) *A Corpus of English Conversation*, CWK Gleerup, Lund.
- [19] Jucker, Andreas H. (1993) “The Discourse Marker *Well*: A Relevance-theoretic Account,” *Journal of Pragmatics* 19, 435-452.
- [20] 河野武 (2016) 「Yes と No : 『<好ましき>の期待』の充足・非充足」『大妻レビュー』49, 57-72.
- データ出典**
- A. Rowling, Joanne K. (1997) *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Bloomsbury Publishing, London.
- B. Ende, Michael (1985[1979]) *The Neverending Story*, transl. by Ralph Manheim, Puffin Books, Middlesex.
- C. Carroll, Lewis (2013[1865]) “Alice's Adventures in Wonderland,” *Alice in Wonderland/Lewis Carroll*, ed. by Donald J. Gray, W. W. Norton & Company, New York.
- D. *The British National Corpus*, KBP.
- E. Summers, Della (dir.) (2009) *Longman Dictionary of Contemporary English*, 5th ed., Longman Group Ltd, Harlow.
- F. Rowling, Joanne K. (1999) *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, Bloomsbury Publishing, London.
- G. Mansfield, Katherine (2006[1921]) “The Garden-Party,” *Katherine Mansfield's Selected Stories*, W. W. Norton & Company, New York.
- H. Forster, Edward M. (2001[1904]) “The Road from Colonus,” *Selected Stories/ E. M. Forster*, Penguin Books, London.
- I. Maugham, W. Somerset (1999[1919]) *The Moon and Sixpence*, Vintage Books, London.
- J. Tolkien, J. R. R. (2007[1954]) *The Fellowship of the Ring: The Lord of the Rings Part 1*, Harper Collins Publishers, London.
- K. Ende, Michael (1985[1973]) *Momo*, transl. by J. Maxwell Brownjohn, Puffin Books, Middlesex.
- L. Rowling, Joanne K. (1998) *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, Bloomsbury Publishing, London.

### Abstract

An utterance conveys not only the speaker's current thought as information but also the concomitant emotion as an expression. Emotives are the forms of designating the distinctive manners of enveloping states of affairs in affective dimensions in sync with intonation and voice quality along with facial expressions and gestures. The present article argues that the emotives *oh* and *ah* are the markers which serve to make it manifest that the speaker is aware and simultaneously making the addressee aware that the state of affairs has noteworthy affective contextual significance. Whenever the import of an utterance is felt to be particularly meaningful or impressive, some sort of emotion is very likely to emerge. Keeping the speaker's fleeting emotional states transparent via, among other emotives, *oh* and *ah* surely helps achieve close psychological ties between the participants. *Oh* and *ah* are associated with their own characteristic shades of feelings: specifically, *oh* with impulsive or responsive (thus dynamic) feelings, while *ah* with the static feelings of being absorbed in or savoring an emotion. *Ah* in addition typically involves underlying background assumptions comprising a variety of socio-cultural ideas and the interactants' shared knowledge. Equally worth noticing is that *oh* and *ah* distinguish manners of saying by attributing to *oh* 'lively' enthusiasm against *ah*, which implicates 'contented' reflection. Furthermore, in everyday talk exchanges *oh* is sensitive to the cause of awareness related to a) the opening of a discourse, b) intensification, c) prominent informativeness of the interlocutor's utterance, d) the speaker's shift of cognitive state, e) a cognitive gap between the participants, or f) anomaly in the interlocutor's utterance, whereas *ah* mirrors awareness of an emerging state of affairs (as in the fulfillment of understanding or empathy with a speech situation) or of the relevance to a background assumption. Focusing on the inherent subjectivity of *oh* and *ah*, this article departs sharply from the previous studies typified by the information management theory and the proposal of a change of cognitive state, whose main concern has been the nonaffective mechanisms of verbal interactions.

(受付日：2019年11月11日，受理日：2020年1月29日)

**河野 武**

現職：大妻女子大学人間生活文化研究所特別研究員，名誉教授

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。

専門は英語学，語用論，音韻論（特にイントネーション）。現在は日英語発話のモダリティ・感情表現の語用論をテーマに研究している。

主な著書：『関連性モダリティの事象 - イントネーションと構文』（単著，開拓社）